



京鹿子

平成二十五年五月一日発行
通巻一〇六五号(毎月一回)日曜刊

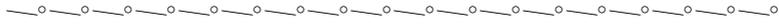
5月号

豊 田 都 峰

灌響集 その四十五

林に降る日を聴いてゐる春障子
山の日を集め鳴りけり春障子
木洩れ日の苔へ春障子開けてあり
三つ並び名もなき雑木山笑ふ
あたたかく並んで里の雑木山
陽炎のかなたを信じとけゆけり





陽炎のむしろむかうを信じる日
隠国の仏を浮かべ水草生ふ
塔影を間に間に水草の生へる国
もくれんや空のあをさをさきどりす
花だよりちらほらほらの風堤
峽を出て花咲ける野の川となる
春風は総氏神の紙垂に立つ
花冷えは亀の井の辺のこくらがり



—丸山佳子作品—

紅うつぎ

丸山佳子



黒こげのパンが胃にみち労働祭
メーデーや娼婦の街は造花挿し
一たばの菖蒲まみどり女湯にも
老婆らと入る菖蒲湯の熱すぎて
鯉のぼり吸ふ野の風をわれも吸ふ

秀華採集

卒園児父足す母は無量大

加藤 翅 英

この硬質の数式に俳句という器は壊れるほどやわいものではない。一番直接的に親を理解する年頃のものにとっては、まさしくこの数式、いや公式は成り立つ。

大旦命をつなぐ水つかふ

宮 田 千 優

春一番うすめあけてる道祖神

松 井 登与子

水のあるところは人間は住んできたが、「大旦」の季語の選択がよい。後句は、そろそろ我が春が来るとばかりに「うすめあけてる」表情がほほえましい。



—近詠—

鈴鹿
仁

さくら餅

白雲に乗るつもりらし石鹼玉
吹く顔に夢ふくらませシヤボン玉
さくら餅一つは妣へ日の巡り
浮かれ人これより先のさくら餅
愚痴ひとつ零さず一生春の川



— 近 詠 —

石 蓐 波

和 田 照 海

石 蓐 波 島 の 床 屋 の 暇 か な
鬼 や ら ひ 海 峡 の 灯 の 一 つ 滅 り
春 立 つ や 湯 気 は 豆 腐 に な る 途 中
山 国 に 嫁 ぎ 狐 火 に も 狎 れ て
芦 刈 の 憩 へ る と き も 鎌 置 か ず



巳の齡 北村香朗
耳中を耳にして行く冬の山
古歴なほ教はる事の多かりき
巳年には変な図柄の年廻り
賀状には巳年姿の相関図
片倉に富士を眺める一と処

組む 藤岡紫水

梅二月彩なき花に香の気品
塔の反り締める日輪二月尽
夙實組む明日の日和を信じつつ
乾坤をつなぎて野火の遠煙
かいま見る人の脆さや薄氷

新緑 竹貫示虹
新緑はまぶし新刊書のにほひ
老鶯の頭上に澄めり香落溪
避難所に歓聲あがる鯉幟
鏡臺をまづ拭いてから更衣
行き交ふに傘傾けし菖蒲園

松田都青
ひとつぶの恋が沈みぬ雪の海
君のこと夢の中では吹雪ぬる
灰にせし思ひ出が舞ふ寒の暮
子の視野に無き人となり餅を焼く
立位より横になりたき寒卵

春よ来い 北川孝子

薄紅梅うなづくだけの友見舞ふ
梅寒し沈黙といふ反論も
梅ふふむ余生ふつくらして来たり
梅疾風桑田眞澄の生きざまよ
曾孫ふたり足なみ揃へ春よ来い

花あせび 柴田朱美
茫洋とあせびの渦に甘き風
ありふれし景にあせびのこんもりと
駄菓子屋のまだある路地の花あせび
咲き満ちてみて淋しさの花あせび
あせび垂れ疼く心をときほぐす



無職 丸井巴水
焼林檎白磁におかれ雪夜窓
寒牡丹濡れさうなる空の彩
寒明けのクレーン無職のままで立つ
干し竿に親子のジーンズ春隣
紅唇のやや濡れ春の喫茶店

塩貝朱千

初蝶やこのひと筋の檨道
居ずまひの悪しき雲あり木の芽風
鳥帰る後の筋書き見せぬまま
モーツァルトに眠る苺の甘き世に
色黒の姉と妹や蝌蚪の国





京鹿子集

豊田都峰選

卒園児父足す母は無限大

京都 加藤 翅英

松笠を蹴つて雨水の土の色

嫁が来て山里明るき猫柳
猫柳風の緊張ほぐしゆく

啓蟄や古文書にある作事方

春節や指折り待ちし中国人

アリソナ 伊吹 之博

着物買ひます売ります坂は四温晴

春隣違ひ楽しむ異国にて

大目命をつなぐ水つかふ

豊中 宮田 千優

日脚伸ぶ公園の子等カラフルに
春隣ドクター髭をそり落とす

初雀のぼる朝日を光背に

ハッピーと言葉を交はし寝正月

オハイオ 水谷 直子

初芝居視線集むる棧敷席

朝まだき神の光かブルーの根雪

年用意刃物研ぐコツ教へもし

風花を身に飾りみる我なりき

春一番うすめあけてる道祖神

京都 松井登与子

枯木立オレンジ色のスクールバス

春一番婆娑羅髪して友の来る